



徳富健次郎著

蘆花全集

第四卷

トルストイ
ゴルドン將軍傳
探偵異聞

昭和四年七月刊行

昭和四年六月廿五日印刷
昭和四年七月五日發行

非賣品

著作權者 德富愛子

蘆花全集刊行會代表

發行者 佐藤義亮

印刷所 富士印刷株式會社

製本所 新潮社小石川製本部

第四卷



發行所 新潮社內 蘆花全集刊行會

東京市牛込區矢來町七十一番地（據藝東京二七一〇〇）

電話牛込 八〇五番・八〇七番・八〇九番
八〇六番・八〇八番

目次

一、トルストイ

例言……………三

小序……………七

第一生涯

(一) トルストイ家……………九

(二) 七十年前……………一〇

(三) 幼児……………一一

(四) 大学生……………一二

(五) 軍人……………一四

(六) 軍人……………一六

(七) 帝都の文學者……………一八

(八) 田舎の教育家……………一九

(九) 翁とツールゲネーフ……………二二

- (十) 大 家……………三
- (十一) 分 水 嶺……………二四
- (十二) 開 悟……………二五
- (十三) 急轉直下……………二七
- (十四) 筆は武器……………二八
- (十五) 社會革新運動……………二九
- (十六) 敵 味 方……………三一
- (十七) 七十の老翁……………三三

第二 著 作

- 叙 言……………四九
- (一) 生ひ立の記……………四九
- (二) 雜 著……………五五
- (三) 哥 索 克……………五七
- (四) 戰爭と平和……………五九
- (五) アンナ・カレンナ……………六六

(六) 吾 懺 悔	二八
(七) 新生涯の新著作	三五
(八) 新生涯の新著作	三九

第三總 論

(一) 露西亞小説	一三一
(二) 四 家	一三五
(三) 所謂寫實	一三四
(四) 所謂心理的解剖	一三六
(五) 小説家	一三八
(六) 哲 人	一四八
(七) 結 論	一五〇

二、ゴルドン將軍傳

序	一五三
---	-----

第一章	二十以前	100
第二章	クリミヤの初陣	105
第三章	清國出征	115
第四章	長髮賊征討(一)	122
第五章	長髮賊征討(二)	128
第六章	長髮賊征討(三)	134
第七章	グレヴゼンドの慈善家	141
第八章	赤道州總督	156
第九章	蘇丹總督	171
第十章	東走西奔	179
第十一章	蘇丹引拂	184
第十二章	カアツーム籠城(一)	191

第十三章 カアツーム籠城(二)……………三三

第十四章 不死の死……………三三

書翰拔萃……………三五

三、探偵異聞

一、巢鴨奇談……………三七

二、うらおもて……………三九

三、毒薬……………四七

四、雲かくれ……………四三

五、秘密條約……………四三

六、大隠謀……………四八

七、まがつみ……………五二

口 繪

『トルストイ』執筆當時の著者……………卷頭

トルストイ……………全上

ゴルドン將軍及其筆蹟……………全上

挿 畫

埃及領蘇丹之圖……………三七

トルストイ

明治三十年四月初版

例言

七年前の秋、國民新聞が何かの事で長々しい發行停止に遭つて居た頃の事であつた、秋晴の空美しい日曜の午後、著者は獨りぶら／＼青山の墓地へ散歩に往つた。何か閑歩の閑讀にもと家兄の書架をあさつて、眼馴れぬ英字の一冊子を見出して、其を懐にして出て行つた。青山の墓地に往つて、麻布三聯隊の兵營と谷一つ隔てた枯れかゝつた草原に横ろびながら、右の冊子を出して讀みはじめた。此は「戦争と平和」と云ふ小説の端本で、原作者は露西亞人で「伯レフ・トルストイ」としてある。讀みかけると、それは／＼くだい面倒な小説。で、時々海の様みどりに碧な空を白雲の駛るのを見たり、兵營の屋根に烏のとまるのを見たりしながら、讀んでは已め、已めては讀みして居た。併し段々讀むで行く内、何時の間にか次第々々に卷中に曳き入れられて、最早心は移らない。眞に夢中だ。一頁又一頁、入目を送る烏の聲も聞き流し、文字の霞むで見えなくなるに頭を擧げると、澁谷の森に眉程の新月が挂つて、少し離れた墓地の石塔も夕霧に包まれてほの白く見えて居る。併し容易に起たないで、暫らくは考ふるともなく夢幻わづらの境に遊んで居た。此れ著者が此老翁に對する初戀であつた。

それからして段々「アンナ・カレンナ」を讀み、「生ひ立の記」を讀み、「哥索克」を讀み、更に「戰

争と平和」の全篇を得て讀み、「吾懺悔」を讀み、宗教に關するもの、文學上の作、苟も手に入るものは讀んで、愛慕の念はますく募る。有體の處、著者は小説が大の好物で、英字のものは大分讀んだ。が、「ミゼラブル」以來此翁の作程著者の心にしみるはなかつた。ツルゲネーフ、ドストイエフスキ、ゴーゴリ——皆英譯だ——を讀むでも、此程に心は動かない。此は著者が趣味のまだ幼稚なるかも知れない、否其れよりも作の中に流動して居る或ものが著者の心に抱合したのであらう。それからして一夜小西増太郎君の翁に關する話を聞いて、いよく其風采を想望して、段々かうじて、一身屑汚塵に眠るを慙づる時には、窃かにビュルコフに倣つて翁が主義の實行者となりたいと思ふことも度々であつた。今日も猶著者は未だ俗心脱せずして、絶對的の平和を唱へ、非愛國非政府を唱ふる能はざるを悲しむ者である。

著者性疎懶、加之此四五年來志氣銷沈して醉日夢月、自家、自家に對して恥づる事のみである。從て十二文豪の中に「トルストイ」の名は掲げてありながら、宿約を果さないで今日に到つた。一昨々年の秋の初一片稜々の骨を青山の土に覆めた民友社の谷口林太郎兄の如きは、折々著者が懶慢を鞭撻して脱稿を迫られたが、著者は僅々一宵の燈下に讀み盡す程の小冊子も得成さないで、谷口兄の墓木已に拱ならんとする迄も猶怠つて居た。

今春思ふ所あつて、身を自然大化の浴槽に投じて滿身の汚穢を一新したいと思ふより、湘南に客と

なつて、舟を漕いだり、蛤を掘つたり、其隙々に曾て讀むだトルストイの諸作を翻して、絶えて久し
いなつかしい師父に逢ふ心地がして、融然心に悅樂を覺える。終に筆をとつて此小冊子を書いた。

著者は不幸にして露語を解しないから、渾て英譯によつて翁の著作を讀むだ。算の水に塵多いこと
は誰も知る所である。材料はステツドの「露國眞狀」の一章、英米雜誌に散見する文字、數年前に聞
いた小西君の談話、(矢崎君もたしか露國文學史からトルストイに關する一節を摘譯して下すつた)、
それから本邦の文學雜誌に出た翁に關する記事、マシウアルノルド「批評論文」の一章、また上野の
書籍館にある名は忘れたが何とか云ふ兩三卷、大抵此等は參考したので、色々撞着した事實不明な點
も少なからぬ。其上著者が未だ讀まない著作も少なからぬので、漏れた所も多からう、間違つた所も少
なかるまい。著者は更にトルストイ翁を知らるゝ諸君子の必ず是正の勞を惜まれないことを信ずる。
文章の俗に近い様に務めたのは、奇を衒ふでも何でも無く、畢竟成丈平易に／＼書きたいと思ふか
らで。併し此も十分一しか成功しなかつたのである。言葉遣ひの煮えきれないのは、著者が田舎漢た
る證據だ。

翁が人物の大なるは、文學者としてにあらずして、哲人たるにある、翁が歐米に知られる様になつ
たのは、文豪としての著作よりも、寧ろ後半生の著作にあらう。此冊子は所謂十二文豪の一冊として、
文豪の翁を見ることを務めたのである。

要するに著者はヤスナヤ・ボリヤナの老翁に對する愛慕の情を表する爲めに、自己を鞭撻べんたつする爲めに、此小冊子を書いた。併しながら若し此冊子が、未だ翁を識らない諸君に翁を識いそるの緒いとを與へ、文學にしる宗教にしる片時も缺く可からざる所謂一道眞摯しんし熱誠の氣を毫厘なり共翁の面影によつて導き入るゝを得るならば、著者は徒らに白紙を塗抹するの恥を免るゝを喜ぶ者である。

明治丁酉三月盡日

湘南春雨瀟々茅舍を濕すの朝

蘆花生識

小 序

トルストイ翁を紹介するについて、
便宜の爲、本篇を三に分つて、

第一、生涯の輪廓を畫き

第二、著作の梗概を叙し

第三、總論を試み

成る可く直截明白ちよくさうびに此翁の面目を
傳へたいと思ふ。

『吾人は人生の要務を

知らざる可からず。

既に之を知れば、刻々

踐行せざる可からず。

何となれば人生の一

刻は乃ち人生の最後

たる可ければ也。』

トルストイ